



### ポート・ピープル

カンボジアの貧しい人々を支援するボランティアの会（事務局 広島祇園教会）



日本に帰化した高山神父

成のきつかけを作ったのは現在、大阪釜ヶ崎の「旅路の里」所長の高山神父である。

釜ヶ崎は日雇い労働者の街、一泊千円前後の安宿が並び、そこに入れない人は公園などで段ボールに囲まれての路上生活をする。最低生活を余儀なくされている人たちに炊き出しや夜回りで毛布などを配るボランティア活動の拠点が「旅路の里」である。

高山神父はベトナム戦争後、ベトナムをポート・ピープルとして脱出し、難民として来日した。その後、日本に帰化し、イエズス会の司祭になった。広島祇園教会の助任司祭の時にベトナムに里帰りしたが、帰国の途中、カンボジアに立ち寄り、かつてベトナム軍が侵攻した国の民衆の多くが今もあまりに貧しい生活を強いられているのにショックを受けた。

帰国後、祇園教会の若者たちにカンボジアの話をする自分たちも行きたいと言い出した。二〇〇一年、高校生を中心に十人でカンボジアを訪問し、それを契機に生まれたのが「ポーターボランティアの会」である。

私は昨年七月、友の会主催の八回目のカンボジア・スタディーツアーに参加した。ベトナムは長い間、戦場だった。フランスの植民地だったインドシナ三国で第二次世界大戦後、再植民地化を図るフランスとの戦いが第一次インドシナ戦争だ。第二次インドシナ戦争はアメリカとの戦いになった。ベトナム戦争で、一九六〇年から始まり、一九七五年、北側、つまり共産側の勝利に終わり、南北ベトナムは統一された。

共産政府から迫害される人や共産主義にない話をする自分たちも行きたいと言い出した。二〇〇一年、高校生を中心に十人でカンボジアを訪問し、それを契機に生まれたのが「ポーターボランティアの会」である。そのうちの五千余人が難民として日本に来た。高山神父はその一人である。

まだ一度も会ったことがなかった。先日、釜ヶ崎の「旅路の里」を訪ねた。現在五十三歳、小柄で実に温厚な感じを受ける。両親は北ベトナム側に住んでいたが、第一次インドシナ戦争のジュネーブ協定（一九五四年）でベトナムが南北に分断された際、南ベトナム側に移住した。

じめない人たちは小さな船でベトナムを脱出した。ポート・ピープルと呼ばれその数は百万人を超えたとされる。

そのうちの五千余人が難民として日本に来た。高山神父はその一人である。

住した人は約百万人、そのうち八割がカトリック信者だった。戦争が終わって共産主義で統一されると、これらの人たちは安住の地を失った。

高山神父がポート・ピープルとしてベトナムを脱出したのは二十三年の時。それからもう三十年が過ぎた。今、日本で最底辺で生きている人々を支援する一方、祖国ベトナムに対しては神父やシスターになる人々を支援する活動をしている。

一九四六年から二十九年も続いたインドシナ紛争。歴史に翻ろうされながらも高山神父の口からは「聖霊の働き」という言葉が何度か出た。穏やかな表情は心の表れであろう。信仰の人である。（元山口放送取締役ラジオ局長）



釜ヶ崎には安宿が並び